

舞姫まいひめ

森鷗外

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓たくのほとりはいと静かにて、熾熱灯しねつとうの光の晴れがましきも徒いたづらなり。今宵こよいは夜ごとにここに集つどひ来る骨牌仲間かるたもホテルに宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。五年前いっごせのことなりしが、平生ひしろうの望み足りて、洋行の官命こをかうむり、このセイゴンの港まで来しころは、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載のせられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、幼き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常よのつねの動植金石、さては風俗ふうぞくなどをさへ珍めづしげに記ししを、心ある人はいかにか見けん。こたびは途みちに上りし時、日記にきものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、独逸ドイツにて物学びせし間に、一種のニル・アドミラリの気象をや養ひ得たりけん、あらず、これには別に故あり。